

## 語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (61) (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後藤 寛

前回 Helen Keller 女史に関し触れたが、生後 1 か月半後に盲聾啞の三重苦となった彼女の例は言語習得(language acquisition)の問題を考える上で参考となる。仮に英語の母語話者を対象に外国語としての日本語のための the semantically sequenced (SS) way of learning Japanese[SS 法]という整然とした grading による流れを銘打った“**Japanese through Pictures**” (JP 本) を著せばどうなるものとなるか？ P (絵) 以外では何？かつて土居光知氏が試みた「基礎日本語」の構想をしばしば思い起こしもする。

本連載では日本人の外国語としての英語修得を考えているのであるが、EP 本 III に Shakespeare の悲劇 *Troilus and Cressida* 『トロイラスとクレシダ』(Act III, Scene iii, lines 109 -111)を引き合いに出す次の箇所がある〔下線は筆者、破線は原文通り〕。

Through reading and reflection we can learn to know ourselves. Reflect for a while on these words of Shakespeare. Thinking, he says, “... turns not to itself till it has traveled and is mirror'd there where it may see itself.” – (EP III, p.223)

文中 3 行目で語の mirror (鏡) を用いている点には特別に注目しておきたい。また前回(59)、前回(60)で触れた米国の G. Blocker が The Meaning of Meaninglessness (1974) 『無意味の意味』で次のように記す下りがある〔破線による省略、下線は筆者〕。

Because of the environment in which I was brought up, a chair is a “meaningful” item in my experience in a way it would not be for someone who had never seen European furniture. I see it and recognize it as something to sit on, rest in, eat on, etc. But if the chair has meaning, one could ask, what exactly does it mean? ... The meaning does not appear as meaning; ...

— Gene Blocker, *The Meaning of Meaninglessness* (p.10)

すなわち、chair (椅子) と命名(naming)された物質を人間は単に ‘see the chair as a chair’ のように「としての存在(being-as)」を知覚(seeing-as)するのみで、‘chair’ 自体には意味はない(meaningless)と彼は見る。「無意味の意味」であり、Ogden-Richards が *The Meaning of Meaning* (p.171)で「意味の意味」を ‘**MEANING MEANS MEANING.**’ 「意味は意味を意味する」と tautology (同語反復: **A = A**) で言ったことにも相通じる。

G. Blocker は一貫し哲学としての ontology (存在論)、existentialism (実存主義) から意味の在り方を「人間による世界の **projection** (射影・投影) とその解釈」と見た。やはり世界の射影としての「意味」(meaning)とは「X に関し(relation)、Y として映し出される鏡像(mirror image; reflection)を、Z として(being-as)の知覚(seeing-as)から解釈(interpretation)すること」のように理解できる。周りの人・物に依存(dependent)し生きている人間は常時、道具(instrument)としての一種の知覚鏡(perception mirror)を携えていて自己(self)と外部の世界(outer worlds)を映し出し結びつけている。そこに見る鏡像は個々人の経験・知識などにより異なった意味のものとも映る (例: 理解 vs. 誤解など)。真・善・美を求めたギリシャ哲学的にはプラトン(Plato)風のイデア論(idealism)とも重なる。



What do we see in the three glasses here ?

mirror (鏡) といえば文学者で数学者 Lewis Carroll の *Through the Looking-Glass, and What Alice Found There* 『鏡の国のアリス』がある。また米国の小説家 E. Hemingway の「釣り文学」(fishing literature) があるが、ここでは水面下と水面上で2で割る2項対立の世界が映し出される。最近はやめているが筆者自身、元来がヘラブナ釣りが趣味で雪の降る新年元旦に魚釣りをしていたこともある。水面を眺めながら哲学的な思索をするには池・川は絶好の場である。釣り場ではいわば水面上に「鏡」を置き水面下の世界を映し出して見ているようなこととなる〔Hemingway 文学に関しては直近では本会での *Year Book 2023*, No. 75 拙論参照〕。

なお、非 Basic 語 ‘mirror’ は EP 本では III で見る形になるが、実はそれ以前に II の *Workbook* で提示される語である〔EP III, p.223、EP II *Workbook*, p.259 参照〕。

今回は Fox News 社の世論調査に関し Trump 氏が旧 Twitter に書いた文を見てみる。

@FoxNews is at it again. So different from what they used to be during the 2016 Primaries, & before — Proud Warriors ! Now new Fox Polls, which have always been terrible to me (they had me losing BIG to Crooked Hillary), have me down to Sleepy Joe. Even considering the fact that I have gone through a three year vicious Witch Hunt, perpetrated by the Lamestream Media in Collusion with Crooked and the Democratic Party, there can be NO WAY, with the greatest Economy in U.S. history, that I can be losing to the Sleepy One. KEEP AMERICA GREAT ! (July 26, 2019)

▲「Fox News 社は相変わらずだ。2016年の予備選のときとその前とはあまりにも違ってきている — 彼らは誇り高き戦士のはずだったのに！社の世論調査ではいつも私にはひどい評価をしてきた(ねじれ曲がったヒラリー(Hillary)に大きく敗北だとされた)が、今度の調査では寝ぼけたジョー(Joe Biden)に負けると評している。3年間に渡り陰險な魔女狩り(Witch Hunt)に遭い、ヒラリーと民主党との共謀でろくでなしのメディアには犯罪人扱いされてきたが、米国史上最高の経済状態となったのに寝ぼけたあの人間に敗北するはずはない。米国をこれまでどおり偉大に(KAG)！」という内容〔結果的には2020年の大統領選で Biden 氏の勝利となったが、Trump 氏は敗北とは自ら認めなかった〕。なお、文中の下から3行目で Crooked の後ろに Hillary がないが原文どおりである。

最初の下線で @FoxNews is at it again. (またもフォックスニュースときたら、あんなふうだ) とあるが、集中力が含意される at に要注目。英語で They are at it again. (彼らはまたもあんなことをしている) はよく言う。一般には at に強勢が置かれはする。

他の3つの下線部 had me losing BIG to, have me down to, be losing to はそれぞれ「敗けた」、「負けとする」、「敗けている」を意味するが、敗ける相手は必ず to である。

このあたりは本連載前々回(59)の(1)でも見たが4つの spatial deep sememes (空間深層意義素) としての <At> <FROM> <THROUGH> <TO> との関わりでも確認しておきたい。ここでは have ... -ing, have ... down の使い方もポイントで、They have me down to +人 のような こなれた Basic 英語語法 にも特別に目を向けていたい。自信がつく。

太線語 perpetrated は「犯罪人にされた」の意味であるが、接頭辞 per- は強意であり原義は「通り抜けること(through)」でそれが「壊れること」の意味に転じもする。perpetrate は morpheme (形態素) {per + petrare} であろうと推測はできよう。語根部 petrare の意味を既知の Basic 語によりどこを求めれば何か出てこないか？ [pæ:pitreit] という音感からも paternal (父の)、patriot (愛国者)、patron (保護者)、parent (親) などの語がひらめいてこないか？ すべて語根 patri からの派生形で原義は「父のこと」である。ここまですればラテン系の [p] はゲルマン系では [f] ([p] → [f]) であ

ることからしても、Basic 語の **father** が思い起こされるだろう。同系語である。連続的に *perpetrate, paternal, patriot, patron, Jupiter, Peter, parrot, petroleum, pattern, patter, pat, father* などと何度も唱えてみるとよい。音感と意味が一体化してくる。

どのように結びつくかであるが、*father* は **Father** (神) の意味にもなる。ローマ神話の神々の王の名 **Jupiter**、また人名 **Peter** (ペテロ / ピーター) も同系。鳥の *parrot* (オウム) は人名 **Peter** の愛称で指小辞(-ot = small)をもっている [本連載(34)参照]。さらに *petroleum* (石油) も同系。また *pattern* (パターン・型・模範)、さらには *patter* (パタパタ(pat-tat)と音をたてる)、*pat* (軽くたたく) なども同系語とするのが学説である。PIE (印欧祖語) の音素形は/PəTER/とされ原義は「神のように振舞うこと」であり、また「次々と速く話すこと」でもあったようである。新約聖書中の有名な主の祈り(Lord's Prayer)の Our Father who art in Heaven ... が、*pattern* 化された僧侶の唱える声に響き、早口で機械的に上記パタパタ(*patter*)聞こえもした擬音語ともされている。

さらには新約『マタイ福音書』に、主キリストが 12 使徒のうちの筆頭ペテロに“言うておくが汝の名は (岩のように堅固な) ペテロ(**Peter**)だ、ペテロという岩を礎石に我が教会を建ててのだ”(And I say to you that you are Peter, and on this rock will my church be based.) — [Matthew 16:18] と告げる有名な一節があるが、ここからも **Peter** という名と語根 *petro* (石) から石油の *petroleum* との同系語の関係も見えてくる。*rock* は、英語では心のよりどころとしてのキリスト(Jesus Christ)・ペテロ(Peter)・教会(church)を象徴する語ともなった [上記一節は初版の BBE (*The Bible in Basic English*) (1949) より引用、プラス  $\alpha$  Basic 語の *rock* のイタリック体表記は筆者]。

謎掛け(riddle)なら“*petroleum* (石油) と掛けて何と解く?”、“*father* (父) と解く”、“その心は?” → “同系語で、上記のとおりである” などとなる。なお、*rock* は Basic では一般科学用語であると同時に韻文用語としてのプラス  $\alpha$  語でもある。分野で重複するプラス  $\alpha$  語は全部で 32 語である [全プラス  $\alpha$  Basic 語のうち分野で重複するこの 32 語の見方などに関する詳細は拙著(2016)「松柏社」、pp.237-240 参照]。

ついでながら、上での And I say to you that ... での句 on this *rock* の配列位置はこれが本来であり、仮にこれを (?)And I say to you that you are Peter, and my church will be based on this *rock*. とすると流れをもつ text 文としてはやや不自然とも言える。同時に my church will be based は、原文のように will my church be based がよい。

聖書の「主の祈り(Lord's Prayer)」の Our Father who art in Heaven ... を引き合いに出したので関連して触れておくが、上記 E. Hemingway が超短編 “*A Clean, Well-Lighted Place*” 「清潔で明るい場所」(1933)で、スペイン語の *nada* (= nothing: 無) を用い「主の祈り」を無意味としパロディー風に書いている次の箇所がある [下線は筆者]。

“Our nada who art in nada, nada be thy name thy kingdom nada thy will be nada in nada as it is in nada. Give us this nada our daily nada and nada us our nada as we nada our nadas and nada us not into nada but deliver us from nada; pues nada. Hail nothing full of nothing, nothing is with thee.” — Ernest Hemingway, *A Clean, Well-Lighted Place*

これは驚きで、新約「主の祈り」の文中の名詞・動詞がスペイン語の *nada* (= nothing) に次々とすり替えられている。Hemingway 自身の虚無主義(nihilism)の一端を垣間見る。

次に、上の Trump 氏の tweet の後半部 Even considering the fact that ... が発話されたものと想定し、基本的に意味的塊り(chunk)に従い同時通訳風に日本語に変換してみる。たとえば、“次のような事実を考慮してみてものことです。すなわち私は 3 年間に渡り邪悪な魔女狩りにあつてきたのです。これはろくでなしのメディアに犯罪人扱いされてきたということ、ねじれ者 Hillary と民主党の共謀によるものであります。それでもあ

り得ません。米国史上最高の経済状態を考えればです。私が寝ぼけ者 Biden に敗けるはずはないのです。” のようにもなる。新情報を積みかけて旧情報としていく訳出である。

いわゆる同時通訳(simultaneous interpretation)の訳出手法は英語の reading や listening 上でのヒントとなる。“同時通訳に始まり、同時通訳に終わる”とも言われる通訳術であるが、一定のレベルでは同時通訳のほうが発話内容を記憶する能力も関わる逐次通訳(consecutive interpretation)よりある意味で理論的にむしろ簡単でなかろうか？

上の同時通訳式日本語文で下線とした部分は情報処理上での thematization (テーマ化) の例となる。発話内容の力点と方向 (意味ベクトル: semantic vector) をあらかじめ予測し、また得られた情報を積みかけるように次々とテーマ化し重ねつつ、談話文全体の discourse cohesion (意味的結束性) を保つように配慮する手法である。アリストテレス(Aristotle)風の syllogism (三段論法) <A = B, B = C → A = C>に象徴される等値関係(=)による論理・論法での事柄の整理法とも言えよう。なお、「意味」を意味する Basic 語 sense には数理的な上記「ベクトルの方向」の意味もある点には注目されてよい。

情報上での memory span (記憶の範囲) はたびたび触れたが  $7 \pm 2$  語とされ、上文 Even considering ... the Sleepy One. は総数 49 語の 1 文で記憶限界語数の 7 倍である。やはり逐次通訳は難しい理屈にもなる。同時通訳のような刻々と発話の流れを予測しながらの他言語への変換を筆者は「予測の意味論」(semantics of expectancy)と呼んできたが、数学での expectancy 「予測値・期待値」からのヒントである。なお、「同時通訳」の Basic での言い方の 1 つ ‘(r ) change from one language to another’ なら括弧内に入る r で始まる 1 語は？ Basic はこういう場合にも伝家の宝刀となる。running でよい。

ところで Trump 氏は何かと物事を否定した論法で説く。否定にはいわゆる全面否定(total negation)と部分否定(partial negation)もあるが、実は否定(negation)の概念は肯定(affirmation)の意味をも含むことは古代ギリシャ時代から注目されていたことがよく知られている。たとえば否定陳述文 He is not here.は He is here. という肯定内容を否定するわけであるが、一方で <He is there. etc.> の肯定の意味を合わせ持っている。

否定の陳述は「それが事実(true)でない」とするが、Ogden-Richards はそもそも否定は否定そのものより何らかの形で「肯定」の意味のほうをより前面に押し出すと考え、特別にこれを「negative facts (否定の事実)」として *The Meaning of Meaning*, p.33 と Appendix (付録) の末尾(pp. 291-295)で取り上げてもいる。重要なポイントである。

要するに「否定の意味」の意味ということになるが、哲学・数学者の B. Russell (B. ラッセル) も negative facts には特別に注目し compatible (矛盾しない) と incompatible <not + compatible> (矛盾する) の例を引き合いに出した点は興味深い。上での等式からすると  $A \neq B$  という否定(negative)の意味は、肯定(affirmative)の等式記号とともに集合記号で  $A = B \subseteq C$  のように示せられるか？ negative facts のもつニュアンスとしての「否定の肯定感」から筆者は独自にこれを ‘negative affirmativeness’ とも呼んでいる。

政治論争には事の真偽(true or false)の見定めが難しい部分が付いて回る。人間の用いる言語での表裏不一致や意図的な二枚舌(duplicity)などを含めた問題は意味論的に注目に値するが、Ogden-Richards は *The Meaning of Meaning*, Chap. IX, pp.194-195 で商取引の例も挙げ欺瞞性(deception)の問題を論じている。EP 本なら III, p.166 で歴史上での貨幣社会以前の物々交換での穀物(grain)の交換との絡みで例示されるが、このあたりは *The Meaning of Meaning* の思想が EP 本に投影・射影(projection)される形となった一例とみたい。なお、great と同系で重要な Basic 語 grain は EP 本 III で Grain and meat and milk and fruit ... として初出(p.28)となるが、印欧祖語 PIE の発祥の地で肥沃な黒海北西部の今日のウクライナ(Ukraine)のオデッサ(Odessa)の主産物となっている。